

## 1. 現在の発掘調査状況

土橋北遺跡A区は、12月にA区西側の調査が終わりました（第1図）。現在はA区東側の縄文時代後期（約3,500年前）の面を調査しています。

今年は1月中旬に大雪が降り、発掘調査現場も除雪をしながらの作業になっています。

## 2. 土壌の水洗

A区の縄文時代後期の生活面では、炭化物が集中する範囲が3か所見つけられました（第2図）。発掘調査の現場では、目につきやすい土器や石器は見つけることはできますが、炭化した種実や骨などの微細なものはなかなか見つけることはできません。

このため、調査では炭化物集中範囲の土をすべて回収しました。現在、この土を5mm、3mm、1mm、0.5mm目のフルイにかけて洗う作業をしています（3～5図）。

洗った土の中からは、木の実や種、石器の小さな破片がたくさん見つけられました。

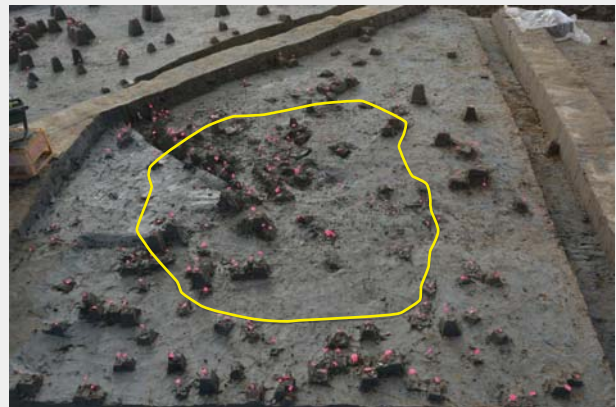
見つけた木の実や種の種類を調べることで、遺跡のまわりの植生や当時の人びとの植物利用の様子を知ることができます。

炭化物集中範囲にはクリ・クルミなどが含まれていました。クルミは数点ですが、クリは大量に出土しています（第6図）。大きさも大小さまざまなものがあります。一般に、暖かい気候であった縄文時代中期には、クリがたくさん食べられたと考えられています。寒くなる後・晩期になると、クリよりもトチが盛んに利用されたと言われています。

ところが洗った土の中からはトチはまったく見つかっていません。土橋北遺跡のまわりでは、どのよ



第1図 A区西側の完掘写真（北西から）



第2図 炭化物の集中範囲



第3図 回収した土を洗う作業



第4図 回収した土を洗う作業



第5図 洗った土の情報を記録

うな植生や植物利用が行なわれていたのかとても興味深いです。

いっぽう、小さな石器の破片は 0.5mm～1 cm ほどのもので、石鏃（やじり）などの石器を作る際に出る剥片（はくへん）です（第 7 図）。「たより 8 月号」でもお伝えしたように、この遺跡では石鏃などの石器はほとんど見つかりません。しかし、炭化物集中範囲の土の中から小さな剥片が見つかったことから、石を割って石器を作っていたことがわかりました。作った石器はどうなったのでしょうか。このことについては、今後検討していかなければなりません。

このように土を洗って目に見えない微細なものを見つけることは、遺跡の性格を考えるうえでとても重要な作業になります。



第 6 図 炭化したクリ



第 7 図 微細な剥片

#### 4. 漆（うるし）が付着した土器について

遺跡からは土器がたくさん出土します。前回のたよりでお伝えしたように、土器にはさまざまな模様が付けられています。土器には、模様以外にも当時の人びとの生活の様子を示す情報がたくさん残っています。

第 8・9 図の土器の内・外面には茶褐色の漆が付着しています。内面（第 9 図）にはべったりと、外面（第 8 図）にはたれたように付いています。内面の漆をよく観察すると、シワのような盛り上がりが見えます（第 10 図）。付着物には炭化物、アスファルト、漆などがありますが、このシワがウルシの特徴になります。日本列島では、漆は縄文時代早期（約 9,000 年前）から利用されていたと言われています。

この土器は壺・注口（急須）の破片です。外面のたれた漆の様子から、装飾のために漆を塗った土器ではなく、漆を入れた容器であった可能性が考えられます。



第 8 図 漆が付着した土器（外面）



第 9 図 漆が付着した土器（内面）



第 10 図 内面の拡大